'93年10月

順正寺報第十五号

報恩講御案内

秋冷の候、皆々様には御健勝にお過ごしのことと存じます。

さて、例年の通り『報恩講法話』を左記により嚴修致します。

宗祖『親鸞聖人』の徳をたたえ、念仏相続の御先祖の御陰を偲びお勤めする大切な行事です。皆様お誘い合せて、万障繰合せの上御参詣下さい。

記

十一月七日（日）

午后一時より

読経（衆僧供養）

法話、おとき

以上

順正寺　住職

江口貫照

『報恩講』について

『報恩講』というのは、親鸞聖人の御恩に報いるというところからスタートしているのですが、「恩に報いる」という事は、「恩」を実感しなければ「報いる」という行動は起きてこないのです。

今の世の中では全て自我が優先して、人様の御恩、親兄弟から受けた恩に気が付く人は少ないようです。「恩」という感覚は自らを見詰めるところからスタートする。「誰かから何かをされた」というところからスタートしていては恩を感じる事は出来ない。自分の中にある、生命、肉体、自分の全てをじっくりと見詰め直す。そうするとその中に親から受けたもの、周りの人々から頂いた、色々な思い、知識、文化、そういうものが見えてくるはずです。それを取り入れ、受け入れたのは、「私」かもしれない。が、それを「取り入れ、受け入れてくれ」という願いがあって、始めてこちらが受けられるのである。自分が賢いから「それ」を受け入れられたなどと思ったら大きな間違いである。小さな子供が父母を、「お父さん、お母さん」「パパ、ママ」と呼ぶ時、その呼び声は、「パパと呼んでほしい、ママと呼んでほしい」という親の願いがあって、初めて出てくるのです。自分から、賢く、気が付き、「パパ、ママ」と呼んでいる赤ん坊などいやしないのです。スタート・ラインを見て下さい。そうすると、自分に、「お父さん、お母さん」と呼ぶことを教えてくれた親の恩がそこにある。「呼んでほしい」という『親の願い』があって、始めて「パパ、ママ」と呼べるのです。

そういう所に気が付けば、『恩に報いる』という事が解ってもらえると思います。

住職

不可思議

順正寺住職　江口　貫照

今年も『報恩講』の季節がやって参りました。五十八歳の今日まで、その年その年の『報恩講』を迎えるに当たって様々な感慨が去来しています。

三十年の昔（もう少し前でしたか）この地に寺を開いて、何のあても無く、とにかく、なんとかお寺を形造っていきたいと言う望みを持って暮らしておった頃・・・・・不思議なもので、一般の商店と同じで、サクラと言いますか、その門前、或いは、店の中が多少とも賑わっておれば、客も自然と入る、というような人間の心理がありますが、寺もやはり似たようなもので、誰一人としてお参りする人のいない寺というのは、何時まで経っても誰も入ってきてくれない、と、そういう状態が十年、十五年と続いておった頃がありました。

当時、一つには生活のため、請われるままに地方に出て、各お寺の、定例のお説教、永代経のお説教、報恩講のお説教とかに、招かれて行っておりました。特に初めの頃は、家におっても何の仕事もないものですから、長い、一ヶ月近くの、お説教行脚（あんぎゃ）といいますか、旅をしたことがございます。長野県の各お寺、茨城県のお寺、栃木、群馬、関東一円を布教して歩いておりました。そういう時に、旅から旅という一つの生活があったわけですが、一席終わってやっと次の所、次が終りまた次の所、その道中で多々、お聖教を読む機会がありました。そういう時に、一番私の心を打ったのは『歎異抄（なんにしょう）』の一説（ごくしゅい）でした。

「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」

というお言葉です。何時も、『親鸞一人』というところを、自らの名前（貫照（かんしょう））と置き換えて、「貫照一人がためなりけり」と、了解いたしておりました。その時その時の味わい方は違うのでしょうが、一貫して言える事は、お念仏に込められた、『衆生を救済したい』と言う願い、如来の本願は、もちろん一切の衆生に懸かっていることなのですが、私にとっては、『私一人のためにこの本願があってくださる。この本願が私を生かしてくださる。そして、又、私に縁あるひとの上にも同じ様に、「一人がためなりけり」と懸かって下さっておる』と、そういう思いがしておりました。

長年の越し方を今一度振り返りますと、妻を得、子供三人を得、そして、いづれも立派に成長してくれました。娘が嫁ぎ、孫も三人できました。

人間のエゴイズムともうしましょうか、人間の情と申しますか、やはり自分の一番側にいる、妻、子、孫が幸せであってほしいという願い、これは何時も私の中から抜け出ない。切っても切れない。そういうような感覚が四六時中あるわけです。そういう、自分の子供が、孫が可愛いと思う時、自分が、良き人で、性格が良くて、或いは人情深くて、善人であるから、子供を、孫を可愛がる事ができるのだと、何かこう、『自分がしてやっている』という思い、これが先に出るのですが、フッと気が付くと、そこに、そういう思いを持てるように育ててくれた親が在り、又、おじいちゃん・おばあちゃんがあってくださった。おじいちゃん・おばあちゃん、或いは親の憶いが、今、この私が不思議にも抱かせていただいている、人間の情と言いますか、そういうものを私の中に植え付け、育てて下さった。そういうような不思議なものが『如来の本願に相通じていくのだ』という思いが貫いているのです。

旅のつれづれに、留守を預かっている妻・子供に思いを馳せる時、『ここでスケジュールを打ち切って帰りたい』というような事をついつい感ずるのですが、そういう、激しい、肉親に対する情、これはある意味で煩悩かも知れません。しかし、そういう煩悩があればこそ『救ってやる』という如来の本願があって下さるんだ。と、そういう受け止め方ができるのではないでしょうか。子供が病気になる、それが医者の薬で、或いは何かで必ず治ると信じておっても、もし治らなかったら親の憶いで治してやりたい、何としても治してやると言うような大それた念いまで持たせて貰えるのは、これはやはり私が病んだときに「俺が付いているから安心しろ」と、そう言って看病してくれた親があったればこそ、自分も同じ様に子供にそう呼び掛け、接する事ができるのだ、と、こういうようにいただけるのです。それが先に述べた、「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、

ひとへに親鸞一人がためなりけり」

というお言葉とつながってくるわけです。

救いの対象というのは、あくまでも凡夫である。凡夫というのは何かと言うと、「自らの力ではどうにもならない」という『自覚』、そういう『自覚』をした人が凡夫なのである。単純に、「俺は凡夫だ」と口の中で、言葉に出して言う人がよくいるんですが、それは凡夫でも何でもなく、凡夫であることを売り物にしているだけなのです。

自らの中に見詰め、そして、どうにもならないというところに気が付いたとき、初めて本当の凡夫としての『自覚』を持つのであり、それは、人に対して口にだして言えるほど威張ったことでもなければ、裏返して言えば、たいへん恥かしいことなのです。善き事などできないくせに、善き事ができると誤解している。それでいて、それができなかったときに、「どうせ凡夫のする事だ」と、逃げ道として使っている。今、そういう人のほうが多いわけです。

しかし、そういう人と比べてこの私は、「まだしもだ」などと思うと、これは大きな罪悪なのです。そういう人と比べてもなおかつ、それ以上に浅ましい自らの中を見詰める目を持った時、初めて、真の『凡夫の自覚』というものが出てくるのではないでしょうか。そこに初めて救いが出てくるのです。

人間、何か自分で出来るようなものがちょっとでもあると、『これだけしたのですから、救って下さい、仏さま』ということになるのですが、そうじゃない。何かしようとしても、とてもでないが何一つできない。できないからこそ、如来の本願に乗せられて、如来様の手の上に乗せられて、その中で何かさせていただいておる。そういうような思いが生まれてくる。生まれてきたときに『凡夫の自覚』が存在するのだとおもいます。

そういうような凡夫なればこそ、『救ってやろう』という『五劫思惟の願』があって下さる。それが誰のためでもなく、私一人のためだというような思いになれるのではないかなと思います。

何時も、私の話の中で出すことですが、私の母がこの私に、『念仏となえる身になってや』と、手を合わせて拝んでくれました。それは、母自身が、自らが仏に救われていくことを確信しておった、その自分が救われていくという確信の喜びと、確かさを相続してくれという願いがこの私にかけられておる。それが、『念仏申してや』という姿となり、私に現前してくれた。母の念いの中では、「こんな私でも救われて行くのだから、我が子、孫、私の縁ある人すべてが救われて行く」という信念があったし、信仰があったし、安心があった。と、こういうように、頂いているわけです。

『自信教人信』と申します（注・如来より賜った信心を、他人にも自ずと廻向していく働き）。親鸞聖人がおっしゃった言葉ですが、『教人信』というのは、教えてやったというのではなくて、

見させてもらった。自分の生きた足跡が子や孫の中に感じられたときに、『教人信』という立場が生まれてくるのではないかなと思います。

相続されたものとはそういうものでしょう。「これだけの、家、土地をあいつにやった」というようなものは、単なる「物の相続」であって、いづれは消えて無くなる物でしょう。『教人信』という「相続」は、「相続させてやった」という相続でなく、知らぬ間に記されていった足跡という感じで受け止めるのでしょう。

そういうような事を少しでもお伝えできれば、私は、僧侶として生き抜いてきた証し、これは一つの奢(おご)りかもしれませんが、そういうものを自分の中、縁ある人の中に見出だせるのではないかと思っております。

『報恩講』というのは、自分の中に、そういうような如来の呼び声、足跡、ご先祖の・親の・兄弟の、また逆転して申せば、孫子の足跡を自分の中に見付け出した時、『報恩講』というものが、本当にいとなまれるのだと、このように受け止めております。

△口　学手

＊歎異抄・・・親鸞の弟子、唯円が、親鸞の没後教えの取り違い、乱れを歎き悲しみ、自分が親鸞より直に聞いた教え、法語を集め綴ったもの。

＊五劫思惟の願・・・阿彌陀の本願。一切の衆生を余すこと無く、全て救いとると法蔵菩薩が四十八の誓願をたてられ、五劫の間、思いめぐられて、浄土の因を明らかにし、西方の地に極楽浄土を建立し、全ての衆生が救われる道を造り上げる事によって大願成就し、阿弥陀仏と成られた。劫とは、天女が百年に一度降りてきて、四十里四方の岩を羽衣で撫で、その石が磨り減り、無くなるまでを一劫。五劫だからその五倍。つまり、人間の知恵では計り知ぬ期間ということ。五劫思惟とは、それほど弥陀の本願というものは、計り知れなき大いなるものであるということを教えられる言葉である。上手く説明できませんが、参考にしてください。了

旅行記

早起きが滅法弱い私。眠い目をしばたたせながらバスに乗り込む。一路バスは茨城へ。『順正寺、日帰り秋のバスの旅』の出発だ。

時は十月四日。前日までの肌寒い悪天候が、目的地に着く頃にはウソのように秋晴れの好天に変わり、最高の旅日和となった。親鸞聖人関東布教の足跡を辿る二回目の日帰り旅行、聖人、所縁（ゆかり）の寺院・三ヶ寺を今回はめぐる。

真宗の寺院は、一般的な観光寺院と違い、親鸞聖人が「ここ」を基点にして布教なさったというだけで、べつだん、取り分けて珍しい物が有るわけでもなく、各寺で、その寺の由来や聖人とその寺の開祖の関係についての話を聞かせていただけるだけであるが、それだけにかえって、日頃別に気にも止めずに見過ごしてしまっているものや、目にはしているが何の感動を得るわけでないものに新鮮味や、感動を得る事ができた。ずっと広がる田畑。そこで働く人の姿。農道にそっと咲くコスモス。苔むした参道。その端に咲く彼岸花とそれに戯れる揚羽蝶。本当に、見るもの全てが何か妙に新鮮に受け止められる。そう、まるで、映画『男はつらいよ』で写し出されるシーンのようであった。そう考えると、やはり山田洋二という映画監督はたいした人なのだろう。映像を通して、人や自然を、やれ、これが映像美だの、人間のあり方だのと、別にお仕着せ無く描き出し、普段ありふれた風景の中に見落としがちなものを描き出すことによって、何時の間にか、観客に心地好さと心に残る映像を見せる。私としては、あの監督のファンだけに、凄いと思いますね。

話がおもいっきり横に逸れました。

とにかく、なにが良かったって、そういった、何でもない風景に感動できた事が、名所といわれるところへいって感動するのとは一味違う感じで、実に味わい深く思えたというそのことに付きます。もしかしたら、そういう自分に酔っているだけなのかもしれませんが。

昨今の世の中、情報化時代とかいって、本当に、巷に情報といわれるものが氾濫しています。そのことが良い悪いは別にして、その氾濫している情報にばかり目がいってしまい、なにか物ごとの本質を見逃しがちになっているような気がする。情報でなんでも判断してしまい、素直に自分の中で判断するということがなくなってきつつあるようにも思える。

それにしても、参加した人が皆元気に無事帰り、何よりでした。了

スクープ！

婦人会で、さぁ大変！

×＋＊@＊＋×@

去る、十月の婦人会で目が回って車酔い状態の人が続出。原因は、茶話会におけるビデオ観賞にあると見られる。事件は、定例の集りの時、十月四日に行った旅行の際、当寺の次男であるSが撮影したビデオテープを全員で観賞してまもなく起こった。その画像の余りの壮絶さに、皆、参ってしまったようだ。

まるでジェット・コースターにでも乗って、度の合わない眼鏡を掛けているような映像を見させられたので、たまったもんじゃない。

何故その様な映像に成ってしまったのか。どうも、Sは、殆ど一回か二回ぐらいしかビデオ・カメラを使った事がないくせに、調子に乗って撮てたという。そのうえ、な、な、な、なんと、カメラのスイッチを入れたまま、大手を振って歩いたり、走ったりしていたといのだから救い様がない。困ったものだ。

その件に関してSは、『大体、俺に撮らせた奴が悪いんだよ。よし、そこまで俺を攻めるなら、俺も言わせてもらうよ。あの時俺は撮りたくなかったんだよ、本当は。でもね、兄貴の奴が、いきなりだぜ、物の五分も経たない内に、バスに酔っちまってよう、自分で持ってきたくせに俺に撮れって言うから、しょうがなしに撮っていたのさ。え？そのわりには面白そうだったって？あんた、そりゃぁ、面白かっ・・・・・・・・・ええぇい、う・うるすわぁい。とにかく、俺のせいじゃない。しょうがなかったのさ。』などと、開き直っているしまつ。この件に関して、Sの兄であり長男のK氏は、『あいつがセンスの無い事を知っていながら、しかし、車に酔ってしまい。致し方なかったのです。』と、そらっ惚けている。

被害者Aさんの話。『来年までに、上手に撮れるように成ってね』

おくりもの

教えなど糞食らえ、
あなたに教わったものなぞない。
自分にそう言い聞かせながら片意地張って、
生きてきた自分こそ、
人には解らぬ、口でも言い表せぬ、
なによりも、己、自らが全く気付かぬ、
教えの相続の現れである。
幾ら嫌った所で、この身に染み付いた、
古からの伝承は、
拭いさるべきではないし、
拭おうとしても拭いされるものでもない。
この身に相続された贈物、
それがなんなのかを見詰め続けていくことが、
自己否定をせずに生きていくことである。

幸福の定理？

挽たての豆に、いったん沸騰させて。
五分冷ました湯を注ぐ、ゆっくりと。
香りが立ち込める。
暖めておいたカップに、出来立てを注ぐ。
そっと口に含む。うまい。
一杯のコーヒーに、幸せを感じる。

平成六年度　年回表

一周忌・・・平成五年
三回忌・・・平成四年
七回忌・・・昭和六十三年
十三回忌・・・昭和五十七年
十七回忌・・・昭和五十三年
二十三回忌・・・昭和四十七年
二十七回忌・・・昭和四十三年
三十三回忌・・・昭和三十七年
三十七回忌・・・昭和三十三年
五十回忌・・・昭和二十年
百回忌・・・明治二十八年

右に記しました通り、来年、平成六年の年会法要は執り行ないます。法事の申し込み、ご相談のある方は、御遠慮なく、ご連絡ください。

「白色白光の会」御案内

十一月の「白色白光の会」は、左記の通り執り行ないます。

記

◎日時・十一月十八日（木）午后一時ヨリ
◎会処・順正寺本堂

新規会員も随時募集しております。
詳しくは当寺までお問い合わせ下さい。

人の価値観というものほど厄介なものはない。なにしろ百人いたら百人が、千人いたら千人がみな個人の価値観を持ち、その時々で自分と同じ、或いは、近い価値観を持つ相手に対しては好意を示し、違う物の考え方を持つ人、特に自分の考えを否定されるような考え方をする人に対しては、どうも、悪意を持ちがちになってしまう。只、逆に知らなかった事を教えられて感謝する事もまま有る。又、相手によっても変わってくる。嫌いな人になにか言われると腹立たしいが、好きな人に同じことを言われても腹立たしくない。大切なのは、そういう自分であるという自覚を持っていくことなのであろう。△口学手

東京都練馬区石神井町三の十七の四
☎03（3996）2064
順正寺

永代経　御案内

風薫る五月、貴家皆々様には御健勝にてお過ごしの御事と存じます。

さて、例年の通り下記により「永代経法要（えいたいきょう）」を厳修します。

「永代経法要」とは、「私」が子供や孫そして子孫の幸福を願うと同じ様に、「私」に幸せで有って欲しいと願って下さっている御先祖に感謝の思いを込めてつとめる大切な行事です。

常日頃、生活の多忙さにかまけて、ついつい忘れている御先祖のお陰に気付き、仏恩報謝（ぶっとんほうしゃ）のひとときを共に過ごしましょう。

萬障繰合せ御参詣下さい。

記

五月九日(日)午后一時

読経　（衆僧供養）

法話　おとき　その他

※当山順正寺では永代経志を左記に定め、過去帳に記載し永代供養致しております。御希望の方は、住職迄お申し出下さい。

◎永　代　経（祥月命日読経）金、壱拾萬円也

◎特別永代経（毎月命日読経　祥月命日特別読経）金、参拾萬円以上

以　上

壇信徒各位殿

順正寺　住　職

『初秋の関東ご旧跡めぐり』日帰り旅行

このたび、茨城県御旧跡寺院三ヶ寺と野田の醤油工場（おみやげつき）日帰り旅行を、執り行なうこととなりました。

日時、費用はくわしくは未定でありますが、十月初旬、一万円弱（参加人数次第で多少変わってきます。昼食代も含まれています。）このように予定しております。

過去二回の旅行会も実に楽しく執り行なわれ、今回もかならず楽しい旅となるでしょう。ここに参加者を募ります。是非、皆で参りましょう。

参加希望の方、お問合わせの方は当寺まで。

東京七組同朋大会お知らせ

来る、八月七日（土）午後二時より、板橋区立文化会館小ホールにて、『同朋大会』を執り行ないます。

当日は、映画監督の松林宗恵氏（森繁久弥の社長シリーズノ監督）の講演、芝居、クイズ等を通して『同朋』について、同じ時を過ごし、考え、そして楽しむ事により、一人、一人が何か一つでも得るものがあればと思っています。詳しくは当寺までお問い合わせください。

平成五年度年回表

一周忌	平成	四年
三回忌	平成	三年
七回忌	昭和	六十二年
十三回忌	昭和	五十六年
十七回忌	昭和	五十二年
二十三回忌	昭和	四十八年
二十七回忌	昭和	四十二年
三十三回忌	昭和	三十六年
三十七回忌	昭和	三十二年
五十回忌	昭和	十九年
百回忌	明治	一十七年

年回法事（一周忌以外）は故人のお亡くなりになられた年を一年にいれて数えます。

右表を御覧になられて、御法事をなされます場合は、ご連絡ください。土曜日・日曜日は重なる事が多いので、はやめに御連絡ください。

注・まず寺にご相談ください。先に日時を決められ、お膳を申し込まれてからご連絡いただきましても、法事が重なってしまってどうしても時間が合わないことがありますので、勝手ながら宜しくおたの申し上げます。

入口学手

〒177東京都練馬区石神井町三の十七の四
03（3996）2064
順正寺